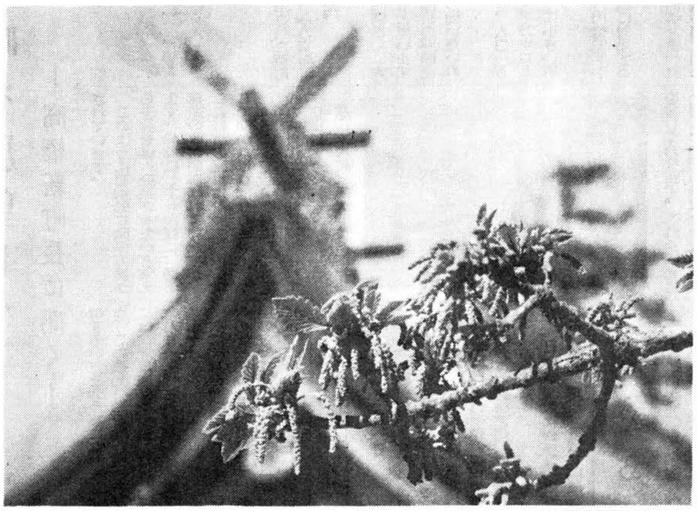
宗像
毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊26番
定価 一年 送料共500円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡支社 福岡市吉塚西林寺町 西林寺内
電話⑥⑤九四五六
本社 京都市下京区油小路通六条北入
電話 京都㉟ 六〇六六・三三四番 七三三七・九七八九番

若みどりしたたるばかり神木の
楢の葉うらに花を見し今日

楢の若葉に



献詠歌会からお知らせ

会員各位の熱意によって開講されました教養講座第一回は、盛会裡に終了しました。

次回は九月に開催する予定です

次回兼題は「青葉」となりましたので、七月末日迄に左記へお寄せ下さい。次回からは佳作の内から抽選により、一名様に記念品をお贈りします。

尚、献詠歌会はどなたでも自由にお入りになれますし、又献詠も自由です。遠隔地の方は早目に御寄稿下さい。

献詠には次の事を守って下さい

一、一月一人一首の事。
一、二十日迄に必着の事、遅れた歌は翌月に廻します。
一、階書ではっきりとお書き下さい。
一、献詠ですので、題材が暗過ぎるもの、穢な過ぎるものは御遠慮願います。
一、兼題の分は、題名を明記すること。

宛先、福岡県宗像郡玄海町
宗像大社献詠歌会係宛

献詠歌会〃教養講座〃を再開

――講師に織田橡雨氏――

去る五月十五日の日曜日、午前十時から、宗像大社献詠歌会が開催された。

この歌会は、発足以来既に七十余回を重ねて来たが、この度、会員諸氏から教養講座を復活開講して欲しいとの要望があったので、定期的に講師を招聘して和歌講座を開設する事に決定した。

第一回は、織田橡雨氏で、御歌所寄人（おうたどころよりうど）であった阪正臣氏の高弟として聞え、当大社の崇敬家でもある。

この日、まず参会者全員神前に参拝し、この後斎館で織田先生の講義があった。和歌の歴史、〃てにをは〃の使い方から、各々の歌を詠む姿勢等、二時間に亘る懇切丁寧な指導に、会員は大喜びであった。又、会員からユーモアのある質問もあって、終始和かな雰囲気の裡に終了した。

尚、この会には、兼題「故山」を献詠して戴いたので、本紙に掲載した。

「故山」

織田 橡雨
新石路の香をなつかしみ思ひ出の
むかしこひしき故里の山

白雲 山人
わらべの日めじろ捕えし山にきて
みやこの翁らむつび語らふ

高橋 昇
故郷の野山は拓け変れども
幼な友どち情けいや増す

久保 晴
清麿が勅を奉ぜし古趾山河
菟佐津の郷はなつかしきかな

永島 桂翁
永年の勤務を終へて里に帰ればわ
れを労はる庭の老松

安部 静子
久々に故里の野を越え行けば
おさなき昔憶ひいづるも

井原 元彦
大いなる故郷の山あたゝかく
そのふところに団地抱く見ゆ

江崎 琴子
春ごとに友とあそびし荒津山
故里しのぶ友も老ひたる

養父 峯子
ちゝはゝの信濃思へば離り来し遠
山脈（やまなみ）の斑雪しのばゆ

吉田佐市郎
限りなく進む現世の波にのり
活気みなぎる初夏の故山

安部 重郎
ふるさとの丘は団地に変りつゝ
山肌けづるブルのとどろき

竹原 圓
ふるさとに残せる吾れの山も見え
団地の写真なつかしきかな

（二面へつづく）

論説

郷土の変貌と他郷の宗像人

遠く故郷を離れて暮らす人々にとって、ふるさとの山河ほど懐しいものはない。殊に仕事のため大都会の煩雑喧噪の中に定着する者ほど幼き日清純な数々の想い出を残したあの野あの浜えの郷愁は一段と強い。自己の信奉するイデオロギーに、生命を賭けて官憲の圧力に抵抗し、遂に祖国を去った往年の思想家山川朁にしても、老いると共に主義主張を越えての郷土えの愛着は、絶ち切れなかったと聞く。ふるさとの山河は理窟の介在せぬ慈母の懐である。

わが宗像を郷土に持つ他郷の宗像人も随分多い。近代社会は青雲の志に燃える若人を、農漁村の刺戟に乏しい環境に満足させない。若い宗像人は伝統の質朴忍耐、その反面に進取の気風に育てられ、多くの人が他郷に雄飛し、今日成功して天下に宗像人の健斗を謳われている面目者も少くない。

遠く海外に移住し活躍している宗像人の便りも、折々愛郷の情を述べて届くが、故郷の香を伝える記事が何よりの楽しみらしい。国内に於ても各地に宗像郡人が同郷会を結成して、折々一堂に集り親睦を図り懐旧談に花を咲かせている。就中在京宗像郡人会をはじめ大阪八幡などの宗郷会は、世話人の努力によって多忙な中に会合が持たれている。

五月七日在京宗郷郡人会が、久し振りに目黒の迎賓館で開催された。郷土からも神郡宗像の尊貴な氏神である宗像大社の宮司や町長が招かれて出席した。宗像弁まる出しで、故郷を同じうする親しさが、一切の遠慮や立場を抜きにしての和やかな歓談風景は、他の種々の目的から開かれる会合などでは、とても見られない親和の満喫そのものである。

数年前にこの郡人会の盛況を目撃した新聞記者が、日本一の郡人会と報道したことがある。それだけ愛郷心も強く、種々の状況えの関心も深い。

東京へ出て四十年を経た或る実業家の話は、特に感銘深いものがあった。

偶然の機会に宗像を訪ねると平素の煩わしい仕事など一切忘れて、たゞ幼少の頃の懐しい想い出が頭に甦って、それで一杯の楽しい一時。故郷が与える千金に替えがたいありがたさが身に泌みる。それにしても山や河が昔の姿を変えつゝあることは寂しさを覚える。友達とよくめじろ捕りに行った山、指折り数えて待った田島放生会に小使銭貰って歩いた釣川、世情の変転に伴うやむをえない事情とは云え、懐しい母の姿が毀されてゆくような気がする。

もう一つ寂しいことは知友親籍が追々と少くなって、知らぬ他人ばかりの住む故郷になってゆく人事の変化である。こちらもいつしか老いているのだから、伯父や叔母など親しみ深い縁者わんぱく時代の幼な友達が、減ってしまうのは当然の道理ながら言葉に尽くせないわびしい気持。故郷は涙を呼びますなとの感慨を聞かされた。

宗像を郷土とする人達に限ったことではあるまい。いづこの出身者にも、近代産業がもたらす都市周辺の農漁村の変貌が、この寂寥感を与えるであろう。宗像もたしかに大きく変貌しつゝある。北九州と福岡の都市の画期的膨張が、中間地区宗像のベッドタウン化を要請し、郡内諸方の山は開かれて住宅団地が造成されてゆく。郷土自体が農耕の進歩は河川の改修となり、教育の振興は学園の増設を見つゝある。

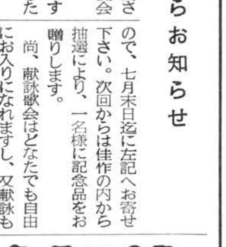
こゝ数年後は人口倍増が予想され、大都市周辺同様の住宅地帯と発展するであらう。郷土を訪う人々を一層失望させる郷愁喪失観が考えられるが、然し、他郷の宗像人よ、千古そのまゝの姿を持続して、慕しい慈母の懐に帰る喜びを味わしてくれる永遠のふるさとがある。

それこそわが宗像大社である。遠い父祖が有為転変の歴史の中に、厳として護持してきた氏神宗像の神々の聖域がある。如何に時代が移ろうと、どんなに世情が変ろうと、大社の姿は将来いつまでも慈母の姿にも似た無限の愛情をこめて、郷土出身の氏子を迎えるであろう。

他郷の宗像人は山河の変貌に失望することなく、氏神の社頭に詣でて、境内を渡る「無」の風の中に、遠い先祖を偲び、曼珠沙華咲く釣川の堤防に立って、水面に写る「幻」の四塚連山に、放生会の回顧に耽ってほしい。

福間町長井原元彦氏の所謂「宗像魂」の永遠の生命は、こゝに宿って変ることはないのである。

× ×



阿蒙少言

連休宵の銀座は、レジャーを楽しむと称する東京人氾濫、とある喫茶室で一服していると、中年の外人夫婦が話しかけた。どうやら今夜泊るホテルへの道を訊ねている様子だが、日本語しか使えぬ身はシドロモドロ。やむなく隣席の文化人に「道を訊ねているようですが、東京の者でありませんので、よろしく」と逃げた。隣席氏は英語ペラペラ。思っただろう秩父の山奥の村長ざまを見ろと。外人夫婦は私を何と見たでしょう、と知人に問えば、これはクイズになろう ○もと〱身につけていない外語、学校出てから四十年全く無縁の人生コース。今さら勉強も覚束なく、老残の野人など銀座界隈を歩かぬがよいと独り語して、早々に雑踏の街をグッドバイ。文明開化は明治生れには嫌なもの ○「念願の仕事を何年か先に果したら、一しょに海外旅行に出るか」と老妻に笑い草を呈すれば「迷惑です、私は行かない」とにべもなく、あっさり断られた。眼が悪いからと弁するのが彼女の口癖だが、どうやらこれも外語の苦手があるらしい。「古池や老いた蛙の思案顔」○ジャーナリズムは何事によらず「史上最高、史上最初」と表現したがるが、東京都に誕生した革新知事は今度が最初ではない。革新の文字こそ使っていないが、進歩的思想の知事は幾人もあった「保守はカビ臭い、革新が魅力的」とは若い女性の評。学生の弁論大会の原稿通りに、生きものの政治がやれると思えば幼稚な空想に類する ○電車の中で革新女性のスカートを見る。膝頭をハンカチで隠しても、大根足は隠されません。如何に無知な流行が誘っても、ヘソ上何糎のスカートは出現しまい。やがて流行は再び脛を隠すだろう。日本女性の良識にそれを望む。 （白雲）

第七十三回 宗像大社献詠歌会詠草

五月七日

於社務所詠草到着順

田島 大野 宗康
ひと杖に神の御心念じつゝ登れば
清し沖津御社

宗像 小野 花居
春の海広々としておだやけき上を
羽ばたきかもめの飛べり

宗像 小野角次郎
太鼓橋より麩を投げやれば池の鯉
集りもつれ水輪広ごる

大井 村山 幸生
短夜の更くるも知らず候補者の得
票の速報のかさしときく

宮田 片山 一
灯火の及ぶ狭庭の梅にして朝の蕾
は宵に開ける

遠賀 長畑 房江
窓の外早や春草に青み居てなづな
の小花も手鏡に見ゆ

宮田 北原 君子
今も尚古きを誇る灯籠の淡く灯り
ぬ山鹿湯町に

飯塚 萩本 石照
目隠しをして供へたる神饌の大き
真鯉の動く音する

田島 占部 由久
さみどりの若葉よそほひ木々はみ
な瑞々しき命みなぎりて見ゆ

福間 森 八蔵
うたかたの如くに消ゆる人の身も
神の恵みで八十五歳を迎ふ

大島 越智 治子
ぐみの実のたわゝになれる山ぞえ
の道を園児とうたいつゝいく

大井 安部 重郎
さわやかに五月の空は晴れ渡り青
葉若葉の風も薫りて

大井 吉田 杏子
めざめきく小寿雞の声けたゝまし
春いよゝ深みゆく朝

大井 吉田 和子
選挙戦終りて畑に下りたてばいづ
くともなく老鶯の鳴けり

大井 木原 房子
あわたゞし町議選挙も過ぎし朝気
高く咲きし牡丹賞ずるも

田熊 鷲頭かつ代
沈鐘の鳴るまぼろしに鐘崎の浜辺
に飽かず海の音聴く

福間 瓜生あさえ
早わらびをつみて遊びし山も無く
団地となりて家並ひしめく

宗像 井上陽之助
夕日さす茶房の窓に夏匂ふ小女の
眉のいみしかりけり

福間 井原 元彦
菜の花の漬物プントかほりゐて思
ひ出させる故郷の母

宗像 小野かをる
曇る日を庭のアイリスこくうすく
影にゆれつゝ今盛りなり

吉武 立石ろせの
還暦を迎えし君の顔晴れて今日の
宴に侍るよろこび

村山田 吉田佐市郎
往き来する車の音の激しさに待つ
鴬も遂に来鳴かず

福岡 江崎 琴子
あそぶ子にいさ帰りなんと鐘が鳴
る愛のひゞきは刻を告げつゝ

福岡 高橋 昇
百とせに此処まで来にし君が代の
あと百年に如何なるらん

小倉 大和 虎雄
旋じ風春の落葉を吹き起し躍り舞
はせて過ぎ去りにけり

宗像 有吉 春子
転勤の夫の白髪殖えにけり五月雨
やまぬ縁に対つば

久留米 篠田 南洞
空豆の花はしぼみて臍の緒の如く
小豆の先につきいる。

宗像 八波 五月
雲の色にふとなつかしき日を思ふ
心のゆとり持ちし此の頃

宗像 原田 リノ
スモッグに覆はれおぼろに見ゆる
陽の空に勢ふ黒と紅の鯉

津屋崎 麦野 時雄
朝食はイチジク一個と牛乳が定食
と聞きイチジク（苗）贈る

津丸 松尾 豊
風邪気味と今朝までいねし老妻が
吾がため作業衣濯ぎ呉れ居り

門司 久保 晴
紙ごろも没る日に透きし雛流すう
しほ花咲く早鞆の瀬戸

田島 白雲 山人
わがいほに夏は開かれぬ鴬を湯川
の峯にしばしたのしむ

田島 末安 大孝
日高見のくにの御山は花華々し千
年をかけて今日もめぐらむ

香椎 桜井 ツ子
児童公園の成りゆく過程娯しめば
けふは赤黄の柵に陽が充つ

名島 久保 房江
若みどりしたゝるばかり神木の楢
の葉うらに花を見し今日

宗像談話室　顔の功罪

バス停のたばこ屋の主人「先生は毎朝のご通勤、バスも満員で大変ですね。」と釣り銭を渡しながらのご挨拶。たばこを買うだけで口をきいたこともないが、どうやらそこらの郊外に散在する超駅弁大学の腰弁講師と、推察しているらしい。顔つきが先生づらに見えるとすると、多少知性に富むのかなと、うぬ惚れが脳裡を走る。

ふと又嫌な気焔が脳味噌に、むくくと吹き上がった「いや、学校勤めではないんです。」あとは言わない。正体を知ってもらう必要もない。取引はたばこだけ。「一山いくらのボンクラ学生どもの、卒業証書購入のための単位稼ぎに、講義の切り売りをやる先生であってたまるか、見そこなうな」とは心の内。

昔なら大学の数も少く、大学教授は帝国大学でなくても稀少価値が高く、世間に買われた。今は超駅弁大学まで入れると、先生の数は七萬何千。その中には「これでも大学教授か」と首をかしげたくなるほど、学力も識見も、人格も、すべて劣悪なシロモノもあると聞く。「俺の顔がそう見えるか、馬鹿にするな」

十数年前のこと、F市のK大学附近で、電車に乗ると、よく学生が帽子を脱いで、会釈する。中には、席を立って譲るのも居た。暫く経ってわかったのは医学部の有名な教授によく似ていることだった。名医の顔に間違えられたのは、悪い気はしない。その後当分は、品よく構えて名医づらを作って、電車に乗ったものである。

やがて学生がお辞儀をしなくなった。聞いてみると、その教授が大学を退職したとのこと。その後何年か経って、ほんものの名医と或る会合で顔を合わせたが、なるほどよく似ていた。

こちらは病人を救うどころか、大学病院のご厄介になったことも幾度かある。あげ句の果ては胃袋を剔出の手術、今は無胃の老獲となって、電車にもバスにも品悪く乗っている。

「新派の伊志井寛に似ていますね。」と旅館、すし屋、喫茶店など、客の顔を一寸見てよく観察する商売で、度々言われてみると、まんざらお世辞だけでもないらしい。東京で、ほんものの伊志井寛先生を見る機会の多い歌舞伎座の老人が、「先生によく似てる」と折紙をつけてくれたところ、似ているのは事実らしい。新派の二枚目も演る名優と似た顔となると、捨てた物でもないうぬ惚れが頭をもたげてくる。

テレビで伊志井寛の湯島の白梅を見ながら、俺だって名女優の水谷八重子のお蔦とならべば、結構上出来の主税に見えようと、うぬ惚れは恐ろしいもの。然し、実際にならんだら、このにせ物伊志井先生はすぐに馬脚を現わして、大向うから「大根役者」とケチがつくに決っている。

機械体操一つ出来ない鈍い運動神経では、何のスポーツも駄目。顔かたちの長い点だけが、天下の名優に似ていても、所詮大根は大根で、畑にある方が無難。ましてや水谷八重子と共演して、歌舞伎座のどん帳を泣かせる一幕の野望など、夢の舞台で、独り描いてみるだけがよろしい、とあきらめるのも、てんで芸術的才能の片鱗も持っていない演技力ゼロの自信が、結論を教えてくれているからである。あわれ名医に似て、学生にお辞儀をされる顔、名優を思い出させて、すし屋のおかみにあいそ笑いをさせる顔、老妻はお粗末の皺だらけを見つめて、気の毒に思うだけらしい。と同時に、名医や、名優に似た顔も、一向にうだつが上がらぬ老骨では、どこへ出かけても、誘惑される心配はないと、絶対の安心が持たれるらしい。

人間四十歳を過ぎたら、自分の顔に責任を持てと、何かに評論家が書いていた。最初からお粗末に作られ、四十を越えたからと言って、急に顔の造作を入れ替えるわけにゆかぬものを、責任の取りようもなかろう。神さまの罪と片づけて、ひそかに苦笑する外ない。

顔は喜こびや悲しみの顧客を持つトレードマークである。作者不詳の商業美術とこそ思え。

（狸住庵）

× × ×

玄海町を展望して

—高橋新町長に聞く—

さきの町長選で当選された新町長高橋半三氏にこれからの玄海町の青真写を伺ってみた。

——住民の皆さんが高橋さんに大いに期待していると思いますそこで当面の玄海町の問題点や将来の夢を一つ伺いたいのですが。

玄海町は御存知の通り、人口一万足らず、面積34・4平方キロと言う所謂猫の額のように小さい所です。

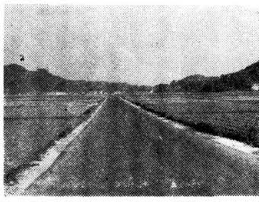
総予算は一億五千万円位ですから、仲々山積する問題に対処するには不十分なのです。

地方自治は三割自治等と言われその事業の多くは、県や国に頼っていますが、私はこれからの玄海町の姿を次のように考えています。

現在の農業については、農業構造改善を適地適材と言う方針で進めたい、蔬菜に適した地域、果樹園の良い山地、養鶏、養豚等その地域に適したものが必ずあるわけで、近くは柑橘の選果場等も設置されています。

このように個別的に関係方面から予算を導入発展させたいと考えます。漁業にしても同様に、漁業構造の改善が叫ばれていますが、この経済の流れに沿って対策を構じてゆかなければなりません。

漁業にしても、農業にしても施設の共有化が必然的に要請されて参りましょう。



次に玄海町は風光明美な海岸線を擁しております。これを観光に活用し、地元の繁栄を計らねばなりません。

神湊から勝島、大島、地ノ島にかけては、色々の観光施設が可能です。

このような問題を考えますと、やはり大島と合併しなければなりません。又、宗像大社の辺津宮様中津宮様の事を考えますと、これは合併でなく、もとの神郡の姿に復するのだと云う事になりましょう。この観光開発を推し進める為には、産業道路を舗装しなければなりません。これは最も急を要する事です。

次に庁舎の問題があります。只今の学校施設の間借り状態では住民の方々には不便なので、一年後には、庁舎用地を考えたいと思います。

いずれにしても、これからは広域行政と云う事になりましょう。

この意味で必要ならば他町とも合併し経済圏を拡充する方向にもって行きたいと考えています。

——とうも忙しい所を有難うございました。

早朝に出勤、休む暇なく各委員会に出席、積極的に町政に取り組んでいる新町長に頼もしさを感じ、玄海町の発展を期待して町長室を辞した。

六月のまつり

六月一日、一五日

月次祭（つきなみ）、午前十時

月次祭とは月並祭或は月例祭ともいい、中世の頃に、六月と十二月に神祇官で行われた祭儀で、一年を二回に分けて、奉幣（ほうべい）が行われたが、本来は毎月奉るべき幣帛であるところから、月次祭というようになったのである。

又この祭りは、国家の隆昌、皇室の御安泰、万民の平和幸福を祈り祖先の神々に対して、清浄禊斎を重ねてまごころをこめて祈願を捧げ、個人個人が最大の努力を尽す事を神に誓い、日々生活を新たにする祭りで、数千年の間、日本人はこの努力を続けて来た。個人の繁栄は国家の繁栄に繋がり、それは又、子孫の繁栄でもある。

当社も本来の儀式にのっとり、毎月一日と十五日には毎月月次祭を行っている。

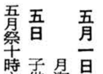
今月の言葉

神を祭る礼は清浄を以て先と為し真信を以て宗（もと）と為す。

神に詣でるには、人は身心を清くする事から始めなければならないお社の門前に手洗いの水があり、手を洗い、口をすゝぐのも、身体をきれいにする事に他ならない。身体をきれいにする事は、又心を清らかなものにする事に通じるのである。

清浄、これは祖先から我々に伝えられている美しい習慣である。

社務日誌抄



五月一日　月次祭斎行

五日　子供祭並に五月祭十時より斎行五月晴の一日よい子達の笑声で御社頭賑わう。久保宮司、東京宗像会出席の為上京す。

六日　宗像大社会計監査行わる。吉武、立石、古賀、広渡各監査委員出席す。氏貞公墓前祭斎行、楠本祢宜、末安権祢宜奉仕す。

八日　神職九州連合大会、宮崎県宮崎神宮にて開催さる。葦津権宮司外四名出席

一二日　福岡市高島校区婦人会百五〇名団体参拝。

一三日　北九州市八幡区、テレビ西日本十日婦人会、四〇名団体参拝。

一四日　献詠歌会午前十時より斎館にて開催。九州大学文学部、新城常三教授他文学部学生二十名、古文書調査を宝物館調査室にて行う。

一五日　月次祭斎行、玄海町長高橋半三氏参列。西鉄社長参拝・伊勢神宮職員、片山、矢野氏来社。

一六日　福岡海上保安部に沖津宮現地大祭打合せの為楠本祢宜出張。

一七日　飯塚宗像会団体参拝。

二一日　結婚記念植樹祭宝物館庭に植樹行う。

二三日　責任役員会斎館にて開催さる。

あやめが満開

宗像大社の藤棚前の神字池に今年もあやめが色とりどりに咲いた。

先月までは、紫色の藤の花房が参拝者の目を楽しませていたが、続いてあやめが咲き出した。

このあやめは元福岡学芸大学学長石橋忠次氏寄贈のもので、年々株が増え、今では二百余株を数えている。神社では、境内周囲の水辺にも株分けすることにしている。

（一面よりつづく）

鷲頭かつ代
愛でられし記憶もはるか父母の
眠りますくに筑後路を恋ふ

久保　房江
白き花と見まがうばかりふるさとの
丘の枇杷畑とりいれ近し

瓜生あさ江
遠き日の友のおもかげ高しいる
子等の遊そべり故郷ののべ

小野かをる
幼な日に遊びし宮居今もなほ
故山は桜花に包まれゐたり

宇都宮　弴
草ふえふき通いし小路今はなし
赤きスポーツカーはしり去りゆく

葦津　嘉之
葦原の浜辺団地が建ち並び
葦津が浦の葦は消えゆく

城戸　敬次
山肌はわずかに緑残すのみ
パワーショベルは重く沈みゆく

大野　宗康
（故里伊予国、旧深田庄日暮の村によせて）
ワラビ喰みまぶたとじれば故里の
青葉にほひぬ日暮の森

山田　幸雄
流れゆく雲を見つめて故郷の
野辺に遊びし吾が友恋うる

升谷　勝良
風薫る筑紫の里にひさかたの
竹馬の友の花便りきく

乙守　信平
故里はしづかにねむる父のごと
青く大きくはえてなつかし

末安　大孝
あおあおと波のごとくにたゞわな
る憶いぞはてぬふるさとの山々

楠本　正
そのむかし若きますらを散りゆき
しふるさとの空今日青みいし

宗像　清文
教子等と花宴せし川土手に
護岸工事の測量旗立つ

太田　可愛
故里の越路の春はいまはしも信濃
の土手につくしなのはな

斎藤　淳
（故里対馬を想って）
いざりせる海人の姿しのばゆる
吾が故里は今はさかりに

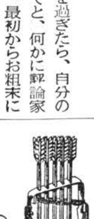
本多　昭和
故里の友の便りの冒頭にミョウギ
リの鳴く声を聞きたり

渡辺　克忠
ふるさとを遠く離れて想い出す
話すことなき母の顔を

許斐（このみ）の旗風

葦浦柴舟　作
福田長庵　画

（其の七）



尊氏宗像へ参向 (二)

しばしの酒宴が過ぎた頃、許斐三郎康氏は悲哀をこめて尊氏に言上した。

さきほどの報告によりますと、太宰府は肥後の菊池勢が猛威をふるい、遂に陥とされ、少弐妙恵入道以下、あえなく内山の城で自害致しました。

「そうであったか……」

尊氏は深くうなずいた。

落胆と同時に同行の少弐頼尚をあわれに思った。すぐ頼尚を前に呼び、彼の父妙恵の死を共に悼んだ。

その時、頼尚は父の遺書を持参していた。これは老父妙恵が自刃の直前に井筒丸と云う童子武者に渡したものであった。

鮮血に染んだ遺書は尊氏の手に渡された。

太宰府を死守し自刃直前に我が子、頼尚にあてた末期（まつご）の一文は悲壮きわまるもので、尊氏は一読、愁然としたきりであった。

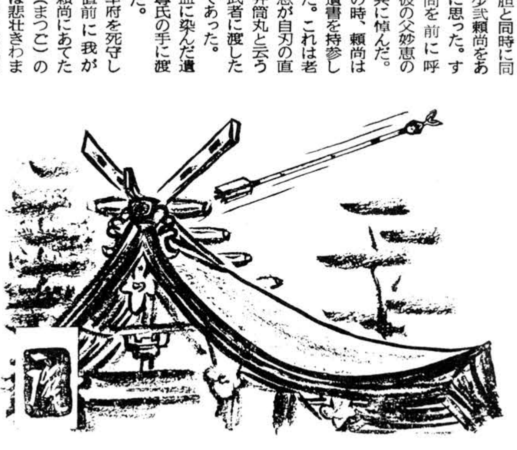
——静かに遺書をささげ、頼尚に返した。唯一のたのみであった太宰府が敵手に落ちては尊氏はあとへ退く所もなかった。まったく天涯の孤軍である。

その時、許斐三郎康氏は静かに語りかけた。

「尊氏殿、そう落胆あそばすな。ここにはお味方宗像の精鋭三百餘騎がおりまする……」

許斐三郎康氏の慰めにより、尊氏はやっと我に帰った。

門前には庭燎が赤々とゆらぎ、兵達は何事も知らず、安らかに身を休ませている。尊氏、直義を初め重臣達は静かに酒盃を交しながら無言の一夜を明かすのであった。



翌早朝（建武三年三月二日）大宮司館（やかた）に斎泊（さいはく）していた尊氏の一行は、許斐三郎康氏の案内で宗像神社へ向った。

神前には尊氏を初め、弟の直義、仁木、細川、高、上杉、畠山、大高、大友、少弐、島津、曽我、白石、八木、岡、南遠江守、等が参列した。

殿上には尊氏奉納の鎧一領、大刀、弓矢、願書がそなえられた。

註　「このとき足利尊氏が奉納した鎧が現在宗像大社宝物館に保存されている。名称を黒韋威肩白胴丸兜付（あいいおどしかたしろどうまるかぶとつき）と云い、昭和三十二年重要文化財に指定された。」

大宮司氏範が祈りをこめて静かに祝詞（のりと）を奏上した。

すると不思議なことに、神殿が鳴動し白羽の鏑矢（かぶらや）が西の方を指して飛び去ったのである。これを見た尊氏の一行は、これこそ宗像大神が擁護し給う瑞相（ずいそう）なりと、意を強うした。

神聖な神事が終ると大宮司は徐ろに立ち上り、

「西へ進めとの御神慮で御座いましょう。わずかな御逗留で、御身も休まらず、恐縮ですが神意のまにく早速御出発なさるがよろしきと存じまする。」

この大宮司の言葉で全軍一斉に出発の準備がなされた。

西へ進む道案内の先導役は宗像党の武将、許斐三郎康氏である。

彼はさきの重臣会議の席上、尊氏方に味方すべく奔走した第一人者でもあった。

そしてまた、このたびの出陣に際し、宗像党全軍の総指揮官に任命されている。

彼は静かに大宮司の顔を見上げた。

「行って参ります。」

ただ一言であったが、重大な決意と闘志が彼の全身に満ちていた。大宮司氏範は、この戦いのすべてを許斐城主、許斐三郎康氏に託したのだ。

「康氏、萬事たのんだぞ!!」

「は、はい、神郡宗像の為身命を捧げる覚悟で御座います。」

いのちを大事にせよ!!康氏の決意を察し、大宮司は涙ながらに出陣のことばを述べた。

宗像党を加えても尊氏方の全軍は現在迄九百余、これをもって三万に近い敵の大軍にいかにしてあたるか、そうした危惧を、兵の心理を大宮司は充分知って知りぬいての決断だ。

「この小勢を少しと思うな。味方は敵の中にいる!」死中に入っておたがい栄えある生を剋（か）ちとろうぞ」

といって出陣のことばを結んだ時は辰刻（午前八時）許斐三郎康氏を先頭に一行はまず宗像川にそい、許斐山に向った。（つづく）

宗像ことばの交歓！

在京宗像郡人会の盛況

— 集まる会員二百名 —

去る五月七日世話人諸氏のお骨折りで、久しぶりに郡人会が芝白金迎賓館で開催された。あいにくの雨天で、新緑の園遊会は館内に移されたが、雨が幸いしてか、連休最後の日曜を遠出する予定の人々も、飛び入り参加となったらしく二百名を超える盛況であった。

先づ世話人を代表して出光泰亮氏が、盛んな拍手を浴びて登壇。次いで日立製作所会長倉田主税氏が、出光興産会長出光佐三氏と共に、同会最高顧問の立場から挨拶に起たれ、郷土人の和やかな集いを祝福して、宗像が誇る純朴質実な気風の中に育った一同の幸いを強調されたので、郷土を同じうする親近感が一層場内に醸し出された。

司会の出光興産大和丈夫氏の指名で招かれた宗像大社久保宮司は、時勢の進運が如何に山河の姿を変えても、神郡の貴重な伝統は依然護持されねばならないし、郡民多年の悲願たる裏伊勢宗像大社の祭祀を本然の精神に復興する勅祭請願運動の新たなる展開を述べて、在京郡人の力強い協賛を求め、町村長会長井原元彦氏は郡内の現況と将来の発展を語り、郷土宗像会や増築中の宗高への格別の配慮を要望された。

郷土弁が交錯する中に開宴となり、新玄海町長高橋半三氏が指名に応えて、宗像大社の御神徳昂揚と併行して郷土の発展に尽瘁したいとの抱負を述べて新任の弁とされ、後は会員の隠し芸など披露されて、嘗て新聞が「日本一の郡人会」と驚異の讃辞を掲げた記事そのまゝの雰囲気が再現されたのである。

午后二時を過ぎる頃、田島ご出身の安部俊介氏の音頭で、在京宗像郡人会の萬歳が三唱され、和気靄々裡に第五回の郡人の集いは幕を閉じた。

歓談のさ中に、郡人会員として中堅どころの数名が、宗高の校歌を合唱された時、ふと思いついた先輩と、後進を結ぶ情誼の復活を述べておきたい。

明治の中期から昭和の終戦前にかけて、郷土から勉学のために上京した学生の合宿寮があった。代々うけついで、在京先輩が後進の面倒を見、物心両面のよき相談相手を持つ学生は、恵まれていたと言えよう。今日も立派な大先輩が多いのだから、戦前の宗像寮を再建して、若い人達により良き希望を与え、先輩の努力を学ばせることが出来れば、何よりの幸である。

誓いも新たに植樹祭

— 宝物館庭園に —

ものみな美しい五月、第四回結婚記念植樹祭が行われた。

この行事は四月中旬より係職員の間で計画された。先づ日時の決定、次に案内状の作成、樹木の選定等につき鳩首協議をする。

その結果、記念植樹申し込み数又農繁期等の都合を勘案して挙行月日を五月二十一日（第三日曜）と定め、四十七組の申し込み者に案内状を発送した。

又、記念木は専門家の意見により「マキ」ならこの時期に最適であると言うことになり産地から若木を取りよせた。

当日、時刻が迫ると未だ新婚の香もういういしい夫婦が集まる、午前十一時、拝殿に於て祭典が行われ宝物館横に記念植樹を行う。スコップに手をそえあって土を盛る若夫婦の上を五月の太陽が微笑みかける。そよ風が吹き若葉がゆれる。汗ばんだ夫のひたいにハンカチを差出す妻、この幸せが永遠に続けと記念の「マキ」の木は、大地に深く根を下し、天高く伸び育って行く、これからの人生の歓び悲しみの日々をその年輪の中に秘めてー。直会場より賑かな談笑が聞えてくる。

宗像大社宝物館

宝物を訪ねて

神鏡の巻 (十)

人物画象鏡

この鏡は写真でわかるように、中国の鏡（写真左）を手本として仿製（模倣国産）された鏡である。ただ中心を囲む外輪の文様帯には、中国鏡の模倣のみでなく、様々な文様帯を組合せ工夫を凝している。人物画象鏡の名称は、中国鏡を見ると良く分るように、鏡背の文様の中心部分に、人物（神像）を刻んでいるところから来ている。写真の中国鏡では、左下に神像を中心として、二人の侍人を左右に侍らし、左上に鹿と思しい獣を配している。他の鏡には、この獣に代って神像が牛馬に乗って居られる像を刻んでいる鏡等もある。

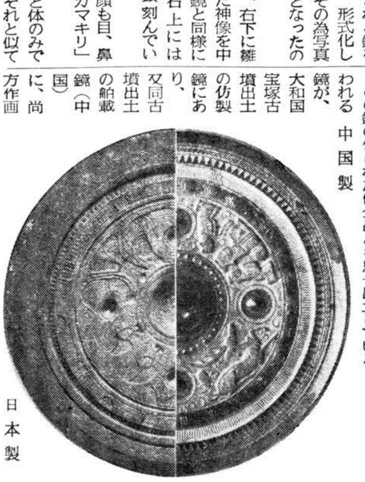
沖の島出土の鏡（写真右）について文様を詳細にみると、文様は甚しく簡略化され、中国鏡の文様が持つ意味は全く忘れられている。これは、千五、六百年昔の仿製鏡作者が、中国鏡の文様の持つ意味並びに中国に於ける生活風習を知ることが難しい立場にあった為、中国からもたらされる鏡を見てその文様を模写し、形式化したのではなかろうか。その為写真右のような仿製鏡文様となったのであろう。

この鏡の文様の人物は、右下に雛人形と思しい袴を付けた神像を中心に、その左右に中国鏡と同様に二人の侍人を侍らし、右上には神像に使える獣を二頭刻んでいる。

神像の顔も、侍人の顔も目、鼻を簡略に彫り、一見「カマキリ」の面相に似ている。

二頭の獣形は、頭部と体のみで顔面相は神像、侍人のそれと似ており、頭部に角とも耳ともつかない小突起を持っている。

この鏡の作られた仲介品とも思われる鏡が、大和国宝塚古墳出土の仿製鏡にあり、又同古墳出土の船載鏡（中国）に、尚方作画象鏡があり、これ等の鏡の原形文様ではないかと推測される鏡が出土している。



新刊の窓

「道をひらく」

松下幸之助著

発刊は一月で、新刊の窓で紹介するにはもう古いとお叱りを受けるかもしれない。

真にマスコミの流れは滔々として、書架は謂うに及ばず座右にまで、あれよ〳〵と言う間に積読？となる時世、この増書の時代に何を読むかは切実な問題と言えよう。

本書は有名な松下電気会長の著氏が主宰する月刊雑誌PHPの裏表紙に掲載されたものを一冊に纒めたもので、巻頭言の集約とも言える。

内容は
運命を切りひらくために
人生のことば
日々を新鮮な心で迎えるために
処世のことば
から生きがいある人生のために
修養のことば
までの十章から成っている。

日常生活の中で、ふと等閑になり勝ちな自己の心構えについての戒めを述べている。明快平易な筆致、一文が二頁に収められていて気易く読める。

全頁を一気に読破するよりも昼休みの小時間、或いは就寝前の五分間、一文を読み、そして考える事を奨めたい。

新書版、二三二頁、実業の日本社発行、￥二四〇円。

魚信

「釣川でクロ当り出す」

連日好天気が続き川はすっかり澄み切ってしまった。

四月より五月初旬にかけて、鯉鮒と珍らしく釣果のあった釣川も今や、産卵期に入った関係もあって全く釣れなくなった。一雨待つ事にしょう。

それよりも、汐合いまで足をのばして、ボラかクロをねらった方が面白い。

ボラは快晴の日が数日続いて、水が澄んだ時の方が釣れ易い。六月より本格的なシーズンに入り群れをなして上って来る。

場所は釣川下流、玄中橋を中心にして、川端橋、五月橋の間。

釣竿三間軟調。道糸二号。ハリス一、五号。針袖三号。餌ゴカイ、キジ。ウキ下約五十糎程度にして、潮の引いた時に流せばよい。

クロは、五月橋附近にボツ〳〵当り出した。六月のクロは数は余り望めないけれども、非常に大型である。夕刻の上げ潮時をねらえば最も効果がある。又、この魚は仕掛けに非常に敏感なために、努めて細めの用具を使用しなければならない。竿グラスロット三間半軟調胴調子。道糸一、五号。ハリス〇、八号。針カイズ五号。餌田エビ、夜釣りなら本虫。

ハリス（〇・八号）を約一米程度にして静かに振り込むが、よく当りを確め、ウキが完全に没して合せる慎重さが大切である。

又。神湊肉落（ししおて）辺ではアブラメが入喰いしているし、神湊、勝島の波止で大型のクロが当っている。

話題の新車をみる (土)

三菱コルト一〇〇〇Fの巻

新車紹介と云うこの欄には、多少趣きを異にするが、今回は三菱重工のコルト一〇〇〇Fを話題にして見たい。と云うのも去る五月十二日に一〇〇〇バンの発売発表を行うと同時に、従来の一〇〇〇DFも多少の粧いを改めた事に意義を感ずるからである。三菱重工が現在コルト一〇〇〇F及八〇〇に使用しているファストバックスタイルの歴史は古い。このファストバックの先がけとなった車はムスタング（米国フォード）であるが、三菱重工も逸早く四十年十月にコルト八〇〇として登場させた。だが車の性能は優れていてもガソリン消費量と云う点で、トヨタパブリカに対抗する事が出来なかった。そこで四十一年九月トヨタカローラに先がけて従来より発売中のコルト一〇〇〇のエンジン及びボデーをベースにし

コルト一一〇〇を発売すると共にコルト八〇〇のボデーにコルト一〇〇〇のKE43型エンジンを載せてコルト一〇〇〇Fとして八〇〇に併せてコルト一一〇〇と同時発売を開始した。全長3・650m全巾1・450m全高1・390mホイールベース2・200m車両重量730Kg最高速度135Kmエンジン型式4サイクル水冷4気筒、内径×行程72×60㎝、総排気量977cc、圧縮比8・5最高出力55PS／6000rPm、変速型式前進4段後退1段フルシンクロメッシュ、登坂力18・9度、回転半径4・5mと云うのが主なる仕様である。この車はファストバック型式にすると共に販売面でも東洋工業に続いて全国統一価格と云う新しい試みを取り入れた。そして宣伝にも意欲的に四十一年九月には「好評のコルト八〇〇の姉妹車」と云う全頁の広告をする程であった。だがその後の販売合戦は熾烈を極めた。サニー、スバル一〇〇〇、カローラ一一〇〇、ファミリア一〇〇〇、ベルリーナ一〇〇〇等々、国産一〇〇〇ccカーは正に戦国時代である。

続いてサニー、カローラの四ドア発売である。

今回の「ニューインテリアで登場」と云う宣伝文で発売した車は外観に於て差程の変化は見られない。心もちラジエータグリルの変更とカーブトグラスの使用、バックランプを両側に一個ずつ、計二個取りつけた事である。むしろデザイン変更は室内で丸型メーターと、ソフトパットで覆われたダッシュボード、木目模様の計器盤にトリップカウンターを組み込み、肌ざわりの良い高級通気レザーシートの採用によって室内をより豪華にする事に心掛け、サイドブレーキ警告灯の装備をした事である。

宗像伝説　其の七十一

続 幽霊船

奇怪な光芒を投げて、幽霊船は行く。暗黒の潮流を蹴って、宗任の亡霊は呼ぶ。

「津和よ、ひるむな、安住の天地が待つぞ、男の児を産め、猛きもののふを育てよ。」

執念の声は鋭く、闇をつん裂いて津和の耳朶を敲く。何か答えようとあせったが、声にならない。我を忘れて宗任の幻影を凝視しつゞけた。

「見えたぞ、宰領の迎え船が」と、喜こばしげに叫ぶ若者の声に、ふと我にかえった津和。夢か、うつゝか、確かに宗任の乗った船が、わが小舟を導いていた筈だが、東天はほのかに白みかけて、ゆく手に河野党の軍船とおぼしき二隻が待っていた。一同はやっと救われた面持である。右馬太は疲れた津和をはげまして、超人的な連日の働きも知らぬげに、ゆったりと微笑んだ。

追跡の役人は、小舟を見失ったゞけでなく、夜が明ける頃、津和瀬の近辺をぐるぐる漕ぎ廻っていたことに気づいて、一同落胆自失、昨夜来の奇怪な謎が、宗任の亡霊の仕業とわかって慄然とした。

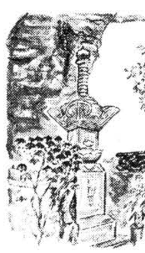
おゝ、幽霊船！その夜、玄海に起った出来事は、波は語らず、御嶽の鳥は答えずとも、いつしか村人の噂となって広がり、無実の罪を怒り、敗残の死を憤る宗任の執念を吊うため、一基の碑が祀られ手厚い供養が行なわれたのである。

今も大島に、この辺りには見かけぬ形の彼の墓石が存する。心ある村人は、彼の菩提を吊い香花を手向けている。津和瀬に寄せる波音は、この英傑の末路を悲しむが如く、美しい侍女津和の貞烈を讃えるが如く、千年の秘琴を奏でている。おお、執念の幽霊船！

宗任は大島に移される前、一時宗像の土穴に幽閉されたとの説もあり、今日の土穴の地名は、当時の故事による由。伝説は真偽を分明にし得ないところに妙味があると思うので、歴史の真実は永遠の謎と断ずる先哲の意見に従って、ホジクリ学者の真似はすまい。

途中で物語の筋道が、変てこな土穴論にそれたが、津和と、その産んだ宗任の遺児の物語に、話を戻そう。

河野党は宗任の教えた造船技術によって、瀬戸はおろか、玄海、壱岐、対馬にも、覇をとなえる程の秀れた軍船を持つようになった。宗任の請いを容れて、津和を壱岐に逃がし、遺児の成長にも陰の援助を惜しまなかったのも、単に悲劇の勇将への同情だけでなく、水軍発展の指導者だった彼の恩義に報いる武士道からでもあった。



歴史の舞台は転々、鎌倉時代に入って、宗任の遺児の子孫は壱岐から平戸五島方面にも勢を得、世に謂う海賊大名、松浦党となって、その軍船の威力は、四国の河野水軍と竝んで声望四隣を圧した。元寇に於いて、博多湾に河野一族のめざましい奮戦が伝えられているが、松浦党も、亦壱岐や、肥前の沿岸防衛に大活躍。巨大な元軍の兵力を各地に破摧した功績は、まことに看過できないものがあったと云う。次いで南北朝の争乱、室町時代から戦国の抗争、それ〴〵松浦党が大きく動いていたのである。

その松浦党の始祖は、安倍宗任の後裔であると大日本史は明かに伝えている。むべなるかな、陸奥に勇名を馳せた猛虎の血は、西海の波涛に躍る飛龍となって流れ、その転機にわが筑前大島も一役の秘聞を残した次第。

なお付け加えておくが、宗任の墓は筑前新宮沖の相の島にもある。何かの事情で、ここでも彼の菩提を吊う始末となったのであろう。純朴な島人の愛情によって、両島の墓碑がいつまでも大切に保護され、慰霊の祀りが絶えないよう願ってやまない。

宗像大社献詠 俳句作品集（五十四）

津屋崎　毛利　夜潮
書庫暗し黴の気配の既に流れ
〃　〃　占部　河童
実梅たわゝ少年口をつぐんだまま
〃　〃　久羽　文王
海に向く百合に漁船帰りつぐ
〃　〃　西住喜三郎
焼跡の木芽吹き五月の空真青
〃　〃　井浦　良介
岬廻る肩に五月の魔法瓶
〃　〃　勝田　光一
ビル工事光る薫風どの角にも
〃　〃　鶴　美津男
花サボテン窓より低し街昏る
〃　〃　岩見佳代子
子を連れて著莪の花咲く土地を買う
〃　〃　浜津　鴻浪
木の香満つ新居埴輪の目細し
田熊　小野　花居
げんげ畑子を守り摘みつ老楽し
田熊　小野　淡坡
水温む目高すいすい影青し
大井　村山　幸生
農業へ孫スタートや密柑園
久留米　篠田　南洞
花の如き木の芽を鼐い去年の路
田島　末安　大孝
花散るに気もそぞろかな雨の音
田島　楠本　正
麦秋の野づらを雨のひたしゆく

出光佐三一問一答シリーズ　⑩

マルクスが日本に生まれていたら

ところが、日本の場合は、祖先が無欲・無私だろう。もちろん、全然我欲がなかったとはいえないかもしれないが、大体それに近い姿を示された。いわゆる徳の形を国民に教えられた。そして搾取したり、圧迫したり、征服したりしようとする悪い奴を滅ぼし、平定していかれた。この平定と征服という言葉は面白いと思うんだ。征服のほうは、自分の我欲のためには、善悪にかかわらず滅ぼす。ところが平定のほうは、平和・福祉のために役立つ人、みんなにとっていい者は奨励し育てていく、悪い者だけを滅ぼすということだ。これが徳の政治ということじゃないかと思う。日本人の徳という言葉が、外国に字があるかどうか。徳ということがほんとうの人間のあり方であって、それがあれば、お互いに譲り合って、平和にいくということではないかと思うんだ。そういう徳をすすめ、悪をこらしめ、全体のためにいいように導かれて、国民もそれを見習って、お互いに仲良くして、平和に暮らしてきた、というのが、日本の歴史だ。日本の皇室はぜいたく・わがままはされず、常に国民のことを考えてこられた。したがって国民から見て、皇室になついてこそいても、皇室を攻め滅ぼそう、などという考えが出る余地はなかった。無防備の所に天皇がおられるなどということは、世界にはその例がないんじゃないかと思うね。それから、奴隷というものも日本にはなかっただろう。国民大衆を奴隷にされたというようなことはなく、むしろ「赤子」というような言葉が使われるように、わが子のようにいたわってこられた。

そう言えば、皇室だってわがまままされたじゃないか、というかもしれないけれども、それはやはり人間であるから、人間らしいことは、百何十代のうちになされた方もあるだろう。しかしその百何十代、数千年間、中心に流れておるものをずっと見きわめれば、やはり無欲・無私であって、大きな愛の手を国民に伸べられて、国民にお互いに仲良くすることを教えられている。そういう大きな愛情の中で、国民は素直に育って、お互いに疑わずに信頼し合って、一致団結するという民族性が出来ている。征服ばかりされた国の人に、相手を信頼するという考えがあるかどうか。ぼくはないと思うね。いかなる場合も、相手を疑ってかかって、人を信頼することはできない。信頼したらひどい目にあわされるということで、自己防衛のために、相手を絶対に信頼することができない。これは、われわれが外国と商売をやってみてわかる。信頼感がない。

そうして一方では、日本人は物などは第二義的で、ぜいたくしておればお互いが仲が悪くなるから、ぜいたくはつつしめよ、質素にせよ、ということを教わってきている。やはり人間は物を中心として対立闘争することが最も多いから、それをつつしんで、お互いに助け合え、ということを教わってきている。やはり人間は物を中心として対立闘争することが最も多いから、それをつつしんでお互いに助け合え、ということを教わってきていると思うんだ。そこに日本人の金や物を超越する民族性が出来上がったんだ。この金や物を超越するところから、日本人の清廉潔白とか、責任感が強いとかいう独特のあり方が生まれてくる。その代表的なものが武士道であり、ぼくらの知っている明治時代の官公吏や、教育者のあり方だったんだ。明治時代の官公吏や、教育者が世界の垂涎の的だったのも、その清廉潔白と責任感の強い点にあった。

外国では、すべてを金に換えて、労働は金で売るべきものなり、ということになって、金に換えることを楽しみとし、金に換えられないことを苦しみとしているが「人の国」日本では、金に換えられない人生の楽しみをもっている。それがさらに積極的になると、人のために金を出してやり、そのことを人にも知らさずに、自分だけで楽しむ、というようなことになってくる。これが東洋の陰徳ということなんだ。出光創業のときに、日田さんがぼくに資金を恵まれて、しかも「金を貰ったことを人に話すな」と言われたのは、この陰徳を身をもって示されたということだ。ぼくにとっては、一生の尊い教訓となっている。そういう日本人の、金を第二義的に見る行き方から、清廉潔白を尊び、清貧に甘んじ、清貧を誇りとさえする思想や、進んで耐乏生活をやるというようなことが出てくるんだね。この清貧を誇るなどという考えは、外国人には想像もつかんだろうと思うね。昔の先生が清貧に甘んじて、子供を教育されたということが、日本民族を育てる尊い基礎になってきたのではないか。だから、ぼくらの子供のときには、先生が最も尊い人と思っていたんだね。

このように見てくると、西欧と日本とでは、そのスタートも出来上がったものも、まるで白と黒の違いがあるんだ。そこで、そういう立派な祖先をもってありがたい、という気持が出てくるのは当然じゃないか。そういうありがたいことを教えられて、ありがとうございますといって祭ったのが、日本の神だ。だから日本の神は祖先だよ。例外はあるかもしれないが、外国では祖先を神に祭っておるところはない。大体、天にまします偶像、哲学だね。外国の神様は哲学を説かれるものということになりはしないかな。それを実行されて国民に示されて、徳のある政治をして、国民を保護されたのが、われわれの祖先、皇室であるということじゃないかと思う。

そして皇室と国民というものは親子の間、家族ということになった。これが、いわゆる日本の大家族主義のあり方であって、日本の家族制度もそこに源がある。

そういうわけで、日本人は、物以外に人の心で結び合って、平和にしあわせに暮らすことを祖先から教わっている。物も要るが物のみじゃないんだ。物はむしろ質素にやらなければ、かえって対立闘争するから、質素にやって、お互いが仲良く暮らすということを国民が知っているわけなんだ。西欧とまるで正反対だということがわかるだろう。マルクスはそういう西欧に生まれ育ったから、物質中心の行き方、信頼とは反対の対立闘争の道しか知らなかったと思うんだ。

ところが、ぼくは無我・無欲の祖先からスタートした日本民族として生まれ育ったから、二人以上でしあわせに暮らす平和・福祉のあり方を知っておる。なにもぼくがこんなことをはじめて言い出したのではなく、日本人としての道を歩いているということだ。ただぼくの場合は、最初にも言ったように、生い立ちから日本人として非常に恵まれて育ったため、純日本人として真直ぐ歩いている、ということは言えるかもしれない。

その結果は、開店後十数年にして共産主義が入ってきたときにすでに資本主義・社会主義・共産主義にとらわれずに、悪いところは捨てていいところは採っていこうではないかと言って、実際に事業経営の中で咀嚼した、ということになりはしないか。しかし、もしぼくが西欧にマルクスと同じように育ったならば、マルクスと同じように物を中心として対立闘争する道を歩いたかもしれぬ。反対に、マルクスが日本に生まれて、ぼくと同じような育ち方をして、同じような学校へ行ったりしておったならば、また、ぼくと同じような道を歩いたかもしれぬと思うんだ。

7「物の国」化した現在の日本を、いかにして本来の姿に引きもどすか

質問　西欧と日本の相違ということは、よくわかりましたが、現在のわれわれの周囲を見ますと、店主の言われる日本人らしい面は、相当影が薄くなっているのではないかと思いますが……

（以下次号へつづく）

経営とは何か

PF ドラッカー

アメリカではこういった不動産とか、あるいは支店の社屋とか、設備とかいったようなものは、比較的低廉に生命保険会社からの資金にてまかなうことができる。アメリカの生命保険会社、あるいは不動産金融会社では、それを専門的に行なって、資金を集める。そして不動産の金融のために貸し付けを行なう。それでそのマージンで十分利潤を上げて運営されている。

アメリカの製紙会社の例であるが、六、七年前にトップの入れかえがあった。

ところが、そこの製紙会社の収益というものがあまりよくない。いろいろと工場施設や製品についても検討し、市場についてもよく考えてみたが何も収益が悪くなる理由が見出せなかった。ところがよく調べてみると、株式資本によってその会社は、アメリカ国内の五〇カ所に大きな倉庫を所有し、また二五の支店を持っている。そういったことから、自己資本、株式資本のうちの約三分の一が、基本的には生産的でない不動産に投入されている状態である。そこで、自己資本から他人資本、借入金に切りかえることによって、この会社は収益を倍にした。

なお、ついでであったが、そういった検討を行なった結果、この会社の業務では、倉庫は五〇カ所も必要とせず、その半分で済む。また支店も三分の一で済むということがわかった。

当初は生産設備の拡充のために、相当他人資本の導入をはからねばなるまいと見られたものが、そういった切りかえをやったために、自分の手持の資金で相当の設備拡充に成功したのである。

第二の例は、アメリカの大きな食品会社のグレンジャー・カンパニーという会社であるが、ここはトウモロコシのかん詰め、トマトのかん詰め、それからグリンピースのかん詰め、これがおもな製品である。こういったかん詰めの野菜というものがなぜ存在しているかというと、人はこのかん詰め野菜を年中必要とし、購入しているということである。ところが、自然は一年中このような野菜を供給しない。結局、収穫時でないと、トマトや豆や、それからトウモロコシというものは得られない。

そこでこの一二カ月にわたっての売り上げのための生産というものが、大体七月、八月の二カ月間に行なわなければならないような状態である。

この会社の創設者である前々社長というのが、この会社の社風として、絶対に借入金をしてはならないということで、全企業体の活動を自己資本でまかなうということを従来行なっていた。こういった野菜のかん詰めというものは一つの商品というよりも、むしろ物品に近いものである。したがってこういうものに投入するということは、結局、銀行の短期の貸し付けの利益ぐらいしか上がらないのが常である。

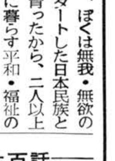
アメリカの場合ではこういう一流会社に対する短期の銀行の貸し付けは、金利が五分五厘（五・五％）程度であるのに対して、自己資本でやってゆけば、少なくとも税込みで二割の配当が期待されている。そこで、実際この企業体でどういうことをやったかというと、借り入れ、あるいは資金を求めるのには二〇％の金利を払って資金を集めて、そして五・五％の収益しか上がらないものにそれを投入しているという形がとられつつある。

この会社は一九五〇年代の初期に、非常に大きな成長をした。そこでこのグレンジャーがアメリカで非常に有名になった。

（次号へつづく）

宗像藪庵先生百話

南方 華やかなりし頃



宗像太郎坊

笑えぬ喜劇

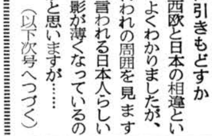
昭和十八年の四月、私たちは映画「戦場にかける橋」の現場に行っていたのであるが、その中でももっとも状況の悪い泰緬国境より十キロほど手前の、ニイケというところにいた。ここはこの時分のコレラの発祥の地で、ここからコレラ菌がケオノイ河を下り、タイマレーにまで流行したために白人捕虜五百六十人、マレー労務者約二万人の死亡者をだした。

くる日もくる日も土砂降りの雨で、一日に河水が十メートルも増水したという信じられないようなこともあった。毎日死ぬし、食糧は頓に欠乏し、米一日三百グラムとなった。まったく泣きだしたくなる日々であった。

ある暴風雨の昼、宿舎の庭の大樹が大音を立ててぶっ倒れた。行ってみると、木の洞の穴を塒にしていたらしく、一羽の青い小鳥が気絶していた。啄木鳥である。介抱してやると気がつき、籠に入れておいたら鳴きだした。「ココココ・ココココ」と、ははあ、こ奴であったか、毎日夕暮になると周囲のジャングルのあちこちから「ココココ」という声が盛り上がってきたが、それはあたかも「あなたも元気か、私も元気だ、では日が暮れるから外敵に注意して」と互いに安否を気づかいあって鳴いているように思われ、われわれも一としおと生命をいとおしく感じたものであった。

泰緬国境のジャングルは〝竹のジャングル〟で宿舎は竹ずくめでできている。竹の床はアンペラを敷いて、将校も寝ていたのであるが、ある日、隙間から長さ四〇センチぐらいの青トカゲの夫婦が入ってきて、将校行李の中を塒にしてしまった。お互いに生命の愛しさを感じていたときのことであるので、追い出しもせず、好きなようにさせておいた。終りには指先に飯粒をつけて差出すのを食べるほど親しくなったが、大きな糞をするのにはまいった。

（つづく）



砂糖の話

田中重雄

砂糖の歴史

シナは紀元前三百年代の作とみられる楚辞に臑鼈炮鼈有蔗漿些とある。これをもってみれば、シナはインドと交通のなかった時代から甘蔗はあったものと考えられる。しかし、この時代は甘蔗を生で食用し、砂糖を造る方法はしらなかったのであろう。砂糖の製法が伝わったのは漢の時代で、この時代は盛んに邦域を拡張した時で、各方面に使節を派し修交した。また初めてシナ仏教が輸入されたのもこの時代である。仏教を輸入したのは後漢の明帝時代で、紀元六五年である。当時トルキスタンを占拠していた大月民族がインドの知識を最も多くもっていたので、この大月民族によって砂糖の製法も伝えられたものなりと説かれている。

コーチは漢の時代にシナに併呑され、晋以来独立したもので、シナとの密接な通商関係があったことは論ずるまでもない。また砂糖がガンヂス文化の賜物であることは間違いないから、インドで育った文化の砂糖が、隣りのコーチに入るのは当然でもある。王灼の「餹霜譜」に古えは只だ蔗漿（甘蔗の茎を搾った汁）を飲む。その後煎じて甘蔗（シラップであろう）となし、また曝して石蜜（蔗汁のアクを抜いた赤糖程度に煮つめて乾燥し固めたものならん）となす。

シナの著書には石蜜、沙飴の言葉が多く記されている。これは何れも砂糖のことで、インド語を意訳してよんだものと思われる。なんとなれば、インドの古語に砂糖を意味して「グダ」また「グラ」は塊または玉という意であり、「サルカラ」または「サッカラ」は「甘き沙礫」という意味であるから、これを石蜜または沙飴と意訳したものであろう。

この石蜜は漢の時代に用いられ、後にいたって石飴・沙飴沙糖とよばれ、現今の砂糖は沙糖から転じたものであろう。明の時代には石蜜即白沙糖也・凝結作餅塊如石者為石蜜・軽白如霜者為糖霜・堅白如泳者為泳唐・皆一物有精粗之異也とあって、明時代の石蜜は再製糖であるかのようにみえるが、唐以前は必ずしもそうでなく、むしろ石蜜とはインドのいわゆる「グル」に相当する粗糖を意味するものであろう。沙飴はザラメ、または白糖をさしたものかもしれない。だが時代の推移に従い、石蜜や沙飴の文字は漸次消滅し、沙飴・沙糖の文字に変ってきている。

我楽苦多告知板

○独身の面々、奥様方が旦那に用があって来るのを見すまし、帰ろうとする所をつかまえ、真赤な嘘を囁いている。

「奥様！知ってますか、出たんですよ、臨時の賞与が、早く取り上げないと旦那のヘソクリになってしまいますよ。」

小憎らしい上司が如何に弁解するかを想像して、密にほくそ笑んでいるのである。

○B君はミステリー小説の大ファン、ヘソクリを払って最新刊を一冊購入、愛読しかけている所へイジワルのK君がやって来た。

「B君！いかす本だね、一寸見せてくれよ」パラパラとめくり、終りの二頁をサッと通読。

「なんだつまらねー、犯人は××じゃねーか」

B君「この野郎………！」